早慶図書館システム共同運用プロジェクト年間報告

本稿では、早稲田大学図書館および慶應義塾大学メディアセンター（図書館）が2019年度に共同運用を開始した図書館システム（図書館業務システムAlma、およびディスカバリーサービスPrimo VE＝統合検索WINE）について、2023年度一年間の経過を報告する。

1 慶應義塾大学との協働体制

共同運用に係る会議体として、引き続き「早慶図書館システム共同運用検討会議」を定例で開催した（p.21参照）。2022年度からのオンライン・ハイブリッド会議の形態を引き継ぎつつ、必要に応じて一部のチームが対面で相手校に訪問して参加した。第52回は対面中心で開催したが、基本的にはハイブリッド形式での開催が継続されている。年度末には例年通り、年別の課題をとりまとめ、両図書館長同士で今後の展望について懇談を行った。

2023年度における両校の協働体制として特筆すべきものは、以下の3点が挙げられる。

・Alma/Primo VEの契約更新

Alma/Primo VEの利用契約は2019年9月から2024年3月末日までであったが、これを5年間延長し、2024年度から2028年度までの5年間の契約更新を行った。

・早慶和書電子化推進コンソーシアム

早慶和書電子化推進コンソーシアムでは、2022年10月より2023年度末までの1年半期間限定で出版社5社の電子化コンテンツ提供を行った。これについては別稿で詳述している（p.3参照）。

・早慶間の取り寄せ貸出、入館サービス拡大

AlmaのFulfillment Networkという機能の導入を前提に、早慶間の取り寄せ貸出、入館サービス拡大について集中的に検討し、2024年度から試行を開始することが決定された。

2 Ex Libris社のサポート体制

前年同様、Ex Libris社からは24時間のオンラインサポート（Ex Libris Support Portal）と、対面のサポート会議（4月26日、7月26日、10月25日、1月31日）が提供された。6月15日に開催されたEx Libris社の日本向けイベントJapan Ex Libris Dayでは、Rapid ILL導入事例について慶應義塾大学が発表を行っている。また、ユーザー主催の国際ユーザー会議IGeLU定期大会は対面イベントとして開催され（2023年9月11日～14日、ベルギー・ルーヴェン）、早慶両校とも2019年以来の現地参加となった。IGeLUでは前述のFulfillment Networkについて開発者と対面で打ち合わせる機会を持ち、その後、追加機能の開発に至っている。

3 Alma、Primo VEを巡る2023年度の動き

Marshall Breedingが運営するLibrary Technology Guides[1]によれば、2023年のAlma設置機関は2,507機関に上る。早慶がAlmaを最初に導入した2019年の設置機関は1,769機関であり、早慶導入の後、約740機関増加したことになる。また、2024年2月時点でTimes Higher Education世界大学ランキング上位30校のうち、7割強となる22校がAlmaを導入しており、世界の大規模研究大学での利用率が極めて高い図書館システムと言える。

2023年9月にはEx Libris社より、Alma Starterという製品が発表された。これは、Almaの電子資源管理機能のみを契約し、既存の図書館業務システムと組み合わせることで利用する製品である。日本国内では統合図書館システム（ILS）としてAlmaを導入する事例は少ないが、大学図書館にとって悩みの種である電子資源管理に特化したAlma Starterと、日本国内ベンダーが提供する図書館システムとの組み合わせが進めば、Almaの国内導入事例が増える可能性もある。また、2023年後半には、国立情報学研究所（NII）が電子リソースデータ共有サービス「電子ブックメタデータ（国内）」のプロトタイプ公開、「タイトルリスト（JUSTICE）」のテスト公開を行ったが、過去に公開された「ライセンス（JUSTICE）」同様、Almaを利用して管理公開されている。

1）https://librarytechnology.org/product/alma/